

日付:2014年7月27日／聖書:創世記18:1～15

主題:「サラが笑った」～苦難からの解放～

「サラが笑った」とあるのは、神の預言に対する不信仰からのものだったのか。私たちはときに、このところをそう理解し、解釈してきたかと思う。しかし、最初に笑ったのはアブラハムであった。17章に「神はアブラハムに言われた。…わたしは彼女を祝福し、彼女によってあなたに男の子を与えよう。…アブラハムはひれ伏した。しかし笑って、ひそかに言った。『百歳の男に子供が生まれるだろうか。九十歳のサラに子供が産めるだろうか。』…」(15～19節)とある。この18章の物語は、そういう不信仰、信仰深いといったたぐいのメッセージではないように思う。また、生まれてくる子どもの名が「イサク」で、その意味することは「彼は笑う」というのは意義深い。ここは「笑う」というテーマが隠されている。

主が言われた「いや、あなたは確かに笑った」とは、サラに対して、その不信仰を問い詰めるということではないようである。最初のアブラハムの笑いも問われていない。サラが天幕の入り口で、旅人の言葉を聞いて笑いがこぼれる。これまで「不妊の女」としてどれだけ苦しい思いをしてきたか。社会の常識として、女性は子どもを産んで当然という慣習に対して、どれだけ苦しんできたか。夫アブラハムに、他の若い女性をサラ自ら連れて来て、その女性を通して自分の子を得ようとした時のサラの気持ちは、どれ程の苦しみであったか。

サラはこれまで「笑う」ということが無かったかもしれない。そんなサラに笑いが戻ってきた。サラが笑ったのは、神に対する不信感から神のみ心を嘲笑ったのではなく、今日まで笑えなかったサラにようやく笑いが訪れた、ということではないか。そのことは、苦難の状況に、長年続いた苦しみの歴史に、神は解放をもたらすお方であるということ。そういう苦難からの解放、笑いのないところに、笑いをもたらすというメッセージがここにあるのかと思う。

ヨハネ福音書で、イエスはこんなことをおっしゃっている。「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」(16:33)。私たちは、いろんなことで悩み、苦しみが絶えないことがあるもの。しかし、すでに世に勝っておられるイエス・キリストを信じて歩む時、私たちは、イエス・キリストによって、喜びを、解放を得ることが出来るのである。

沖縄の置かれた現状に憤りを覚えて立ち上がったキリスト者の平和活動の一つに、「普天間基地ゲート前でゴスペルを歌う会」がある。強大な軍事基地に対して、余りにも弱小の群れでしかないかもしれない。しかし、この群れに連帯しようと東京で、福岡で、ゴスペルの会が結成され行動を起こしている。この連帯の輪は、平和活動を起こしているキリスト者の群れに喜びと勇気を与えている。

神は苦難の歴史に、現状に解放をもたらすお方である。既に世に勝っておられる主であることを覚えたい。そして私たちは、勇気をもって現状の「苦難」に向き合っていきたい。(神谷)